

木曾川文庫

木曾川

INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《南木曾町》

歴史とひのきの薫る里、南木曾町

AREA REPORT

伊勢小屋沢の蛇抜け災害と砂防事業

気ままにJOURNEY

歴史ドラマが織りなす緑の山里

歴史ドキュメント

西濃輪中地帯を支えた金廻四間門樋その構造と技術的特徴

TALK&TALK

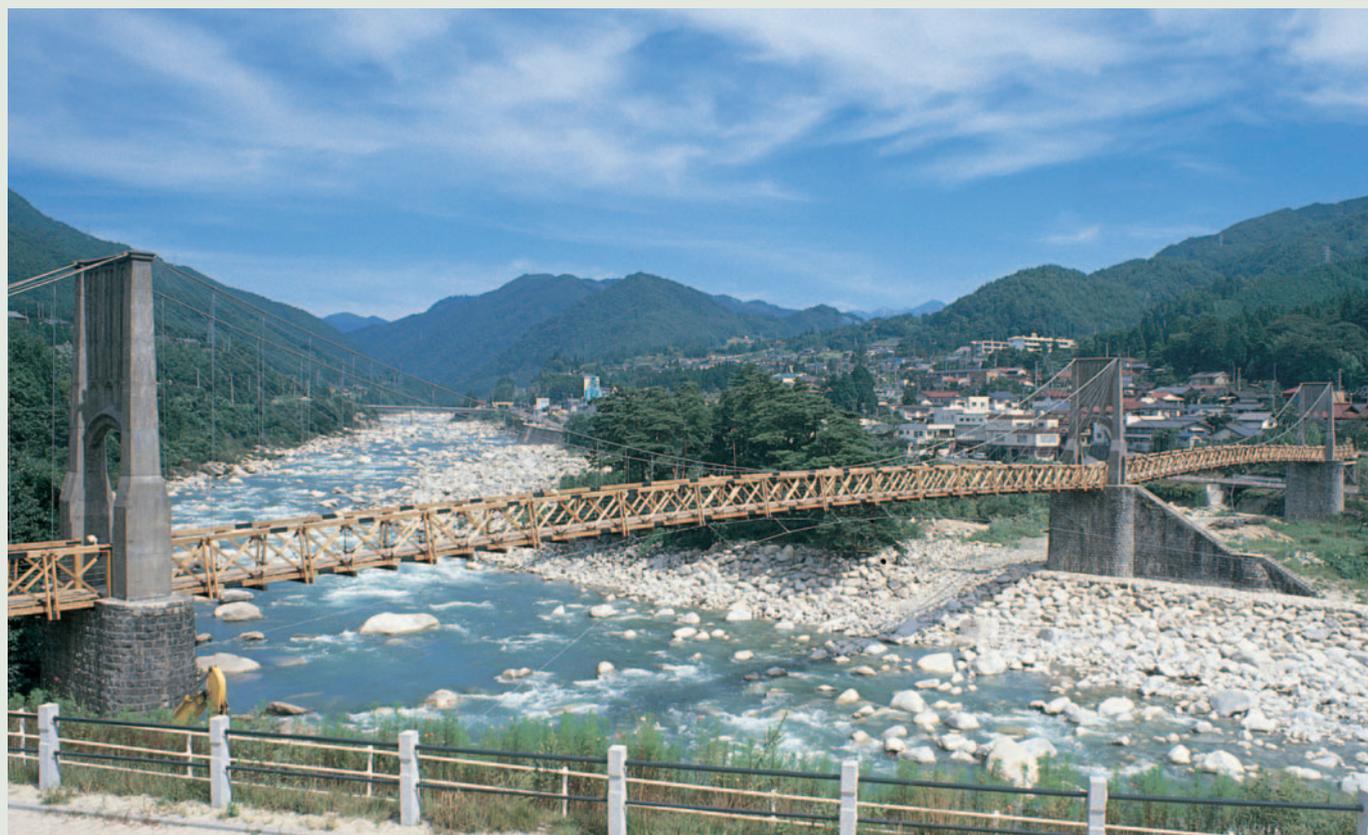
たたき土について

民話の小箱

白蛇のお告げ



木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
夏号は木曾谷南部の玄関口、
南木曾町から土石流の災害などを中心に
金廻四間門樋では、その技術的特徴を特集します。



建設省中部地方建設局
木曾川下流工事事務所

歴史とびのぎの薫る里 南木曽町

南木曽町は木曽谷南部の玄関口。

東国と都を結ぶ交通の要衝として、時の為政者から注目を浴びていました。太平の江戸の世を迎えてからは

豊富な山林資源と木曽川水系の水利権は、尾張藩の支配下に。

「木一本首一つ」と歌われるほど、厳しい規制がしかれていました。

この規制は明治時代を迎えても改善されることなく御料林事件などが勃発。現在は、妻籠を核とした観光整備事業が実施されています。

木曽谷有数の美林地帯

南木曽町はその名が示すとおり、木曽谷南部の玄関口です。東部には木曽山脈、西部には飛騨山脈に続く山々が連なり、中央部には独立峰南木曽岳（一六七六m）がそびえています。これらの山々を縫うように、木曽川と支流の与川、柿其川、蘭川などの河川が流れ、流域のわずかな平地に集落が散在しています。標高は三三〇m〜二二三五m。町域のうち山林は約八〇％、原野は約一〇％を占め、耕地は一％にすぎません。気候は長野県では比較的温暖ですが、地形の関係から降水量は多く、年平均で二、五〇〇mmにも達しています。地質は花崗岩で、多雨と急峻な地形とが相まって、蛇抜けと呼ばれる山津波の常習地帯です。その半面、このよつな自然条件が木曽檜を育成し、古くから美林地帯としてその名を馳せています。

現在も工業出荷額の約八〇％が木材・木製品で、山林へ依存する割合は高くなっています。また、全国で初めて集落保存を実施した妻籠宿があり、それを核として各地区に観光拠点を整備されています。

南木曽のあけぼの

南木曽町の太古を顕著に物語る遺跡は、縄文「蛇抜け」と呼ばれる土石流の跡です。妻籠や三留野などで発見されており、豊かでありながら



猛々しい自然条件は原始の時代に始まっていたと思われまふ。

山深く谷の険しい木曽は、稲作には不向きな土地柄。その木曽に人々が住み着くようになったのは、和銅六年（七二三）の吉蘇路の開通がきっかけでした。

二の吉蘇路は、東国と都を結ぶ東山道最大の難所「神坂峠」を避けるために開かれた。木曽谷を縦貫する街道でした。しかし、人家が極めて少なく、昼なお暗い山中に開かれた街道は維持が困難なため、あまり利用されず、官道として大に利用されるようになったのは平安中期になつてからでした。



東山道吉蘇路（大妻籠谷掛）

木曽は信濃か美濃か？

古代の木曽は、絵の上郷と称され、美濃国恵那郡に属していました。しかし、その所属をめくり、美濃と信濃が争つようになります。その原因の一つに、平安初期、信濃国府が上田から松本に移転し、木曽との距離が極めて近くなったことが挙げられます。この件については時の朝廷は吉蘇路が美濃国司によって開かれたことを理由に、現在の鳥居峠・長野県木祖村以南を美濃国と裁定しました。しかしその後、信濃なる木曽と歌われたように、あいまいな状態が続きました。

中世の南木曽町も同様に、「美濃なる木曽」でした。後に中山道の宿場が置かれた三留野一帯は小木曽庄に、妻籠以南は美濃国岩村を本拠とする遠山庄に含まれていました。前者の地頭は、桓武平家の流れを汲む眞壁氏、後者は伊豆から来た加藤氏後の遠山氏が支配していました。

しかし一五世紀後半になると、木曽北部を支配していた藤原氏・木曽氏が南部の眞壁氏を倒し、遠山庄にも勢力を拡大。木曽は木曽氏によって統一支配されることになりました。

交通の要衝、妻籠城

木曽を統一した木曽氏は戦国大名に成長する条件を整えましたが、危機は北から訪れました。武田信玄の軍勢が鳥居峠を越え、木曽氏を猛襲。天文二四年（一五五五）には、ついに武田氏の軍門にくだりました。

木曽氏・武田氏がともに重視したのが妻籠です。妻籠は、北は木曽川、南と西は蘭川に守ら



南木曽町空撮



妻籠古城図

れた要害で、東には後の中山道にあたる街道が通り、南には信濃国伊那へ抜ける追分を擁した交通の要衝だったことが大きな理由です。

天正一二年

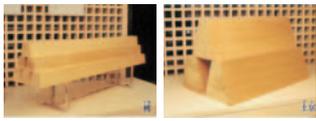
(一五八四)には、小牧・長久手の合戦の一環として伊那を越えてきた徳川家康軍を木曾氏の家臣山村長勝が妻籠城に籠城し、撃退しています。この妻籠城は豊臣秀吉の代官、石川光吉の支配を経て、元和元年一六一五の一国一城令によって破却の憂き目に、戦国末期木曾氏は関東へ移封されましたが、妻籠城にまつて大軍を撃退した家臣は土着、江戸時代には、庄屋・本陣・脇本陣など、村の要職を務めました。

木年貢と下用米

江戸時代の木曾は、はじめに幕府領、元和元年からは尾張藩領に属しました。木曾の山々と同時に木曾川の一元支配を許された尾張藩は豊田秀吉、徳川家康を踏襲し、代官に木曾氏家臣の山村氏を任命。山村氏は幕府旗本と尾張藩家臣であるという、いわば「二重国籍をもつよう」になりました。

山村氏の木曾支配は当初、木年貢と下用米という全国でも稀な貢租形態をしていました。これは、土着・樺という木材を現物で上納すれば反対給付として、下用米を住民に支給するというもの。木曾の耕地は、もともと住民の三分の一しか養えない収穫高でしたから、尾張藩はそんな木曾から米を取り立てる意志はなかつたはず。

しかし、広大な木曾の山林も乱伐によって急速に荒廃するようになると、尾張藩は山林保護の必要から、寛文四年(一六六四)以降、いわゆる木曾五本じしき、



樺 土居

サワラ・アスノコ・ウヤマキ・ネズコの伐採禁止や留山制度、入山・伐採一切禁止の確立などの林政改革を実施し、山から住民をしめ出す過酷な政策を行いました。次いで、享保九年一七二四には木曾谷総検地を実施。これにより、木年貢は廃止され、米年貢に一本化されました。それに先立ち寛文九年(一六六九)、蘭村の権右衛門が木曾谷中を引き回しの上斬首され、首は獄門にかけられました。権右衛門の罪状は、横皮剥ぎ。横皮は火縄銃などに使用される貴重品でしたが、皮を剥くと木が枯れてしまうことから、尾張藩は禁止令を制定。それを冒した権右衛門は見せしめのため、処刑されたのでした。

江戸時代、まさに木一本首一。しかし生活の術を絶たれた住民はその後も禁を犯し、多くの人が処刑されました。

妻籠宿と和宮降嫁

木曾の南玄関口南木曾は、南北の中山道だけでなく、東西の清内路街道、大平街道、飛騨街道が交わる交通の要衝でした。中山道の宿駅として、南木曾町に妻籠・三留野の二駅があり、妻籠宿の本陣は島崎氏、脇本陣は林氏が勤めていました。この両氏は、妻籠城で戦った木曾の土着、明治の文豪、島崎藤村は同族の馬籠島崎家の出身です。

幕末にはこの宿駅を皇女和宮や水戸天狗党などが通過。尊皇攘夷に揺れる幕末の緊迫感、南木曾にも街道から運ばれてきたようです。

南木曾町誕生と中央線の開通

明治七年、全国各地で江戸時代の小さな村々が統合されて、新しい村が誕生しました。南木曾では政府の強引な政策により、与川・三留野・柿其の三村が合併し、それぞれの村の頭文字をとった諸書村が発足。これに対し、与川村では反対運動が起りましたが、鎮圧されあきらめなく終局に、このよくな変遷を経て、昭和三六年には現在の南木曾町が誕生しています。

明治一六年、明治政府は東京と京都を結ぶ中山道鉄道の敷設を発令しました。そのルート

として、伊那を通るか木曾を通るか大きな焦点となり、両者の熾烈な誘致合戦の結果、明治一七年、ようやく木曾谷を通過することが決定しました。建設は日清日露の戦役によって遅れ、中央線が開通したのは明治四四年。幹線鉄道の木曾通過は、南木曾町に大きな恩恵をもたらしました。

島崎広助と御料林事件

明治時代、木曾谷一帯を揺り動かしたのが御料林事件です。江戸時代、尾張藩の厳しい規制にあった山々を、明治になつて取り戻すとした住民は、留山はもちろぬ、入山を許可されていた明山まで官林に囲まれ、江戸時代以上に苦しむことになりました。

一の官林有区分に対して、反対のノロソを上げたのが島崎藤村の実兄、島崎広助です。妻籠本陣の当主となつた広助は、問題の解決にあつた木曾住民の先頭に立ち奔走。この時期、官林が天皇所有の御料林に指定されたことから、運動は困難な局面を迎えました。このころ、明治時代の天皇は現人神、反対を唱えることは天に舌を引くとされたからです。しかし広助はあきらめるとなく、明治一〇年代に東京に居を構えてからも、生涯の盟友友宮下席三(長野県山口村)と粘り強い交渉を続け、山は返して貰ったのでしたが、御下賜金という形で解決をみることができました。

明治の木曾谷の懸案事項は、この他にも水利権問題がありました。木曾川とその支流は、水力発電にはつてつけ、福沢諭吉の娘婿で電力王と称された福沢桃介は、巧みな戦略で木曾川水系を手に入れ、精力的に発電所を建設していきました。

一の桃介の前に立ちはたかしたのが、島崎広助です。水利権交渉は木曾の人々が丸とらなれば、いい結果がでないことを憂慮し、大正八年にはようやく各市町村から委任され交渉に



工事中の三留野駅(現南木曾駅)全景

就くことができず、しかし、桃介の切り崩し工作に遭って成功せず、失意のうちに二年後には手を引きましました。

このように、近代という夜明けを迎えた南木曾町は、山々を背後にしなから豊富な木材資源を利用することができず、豊かな木曾川を目前としながらその水源を利用できず、まさに夜明け前に逆戻りをしてしまいました。

妻籠を核に観光事業を展開

昭和に入つても、南木曾は依然夜明け前でした。政府の満州進出に伴い、南木曾も満州移民を決定。昭和一四年には第八次移民として入植し、満州讀書分村が成立しました。しかし、分村計画が軌道に乗り始めた昭和二〇年には敗戦。すべて水泡に帰したとともに、虐殺や暴動、収容所での疫病などで、開拓団の六割近くが帰らぬ人となりました。

辛く悲しい敗戦の後、南木曾町は復興に乗り出します。昭和二二年には全国最初の公民館が妻籠に開設。一の公民館運動が、その後の妻籠保存運動の基盤に。昭和三〇年に降始まった過疎化のなかで、妻籠は全国に先駆け町並み保存を実施しています。町並みは文化財であり保存がすべてに優先するという理念は、次第に全国にも影響を及ぼし、昭和五一年には、妻籠は重要伝統的建造物群保存地区に選定されました。

一の妻籠宿を核にして、町を上げての観光事業を実施。戦前からの田立の滝をはじめ、柿其深谷、歴史の道、木地師の里などの観光地が開発されています。

参考文献

- 『南木曾の歴史』一九九六年南木曾町博物館
- 『南木曾町誌』一九八二年南木曾町
- 『長野県地名大事典』角川書店



右：島崎広助と左：生涯の盟友友宮下席三

伊勢小屋沢の蛇抜け災害と砂防事業

蛇抜けは大きな石、根付きの樹木まで、怒濤のごとく流しさらす土石流。この災害のルーツは縄文時代。

以来、蛇抜けは連年のように発生し、多大な被害を与えてきました。昭和二八年に発生した伊勢小屋沢の蛇抜けは、被災地が中学校であったことから、全村的な課題に。現在では、建設省の直轄砂防区域に編入され、ハド・ソフト合わせた事業が計画されています。

南木曽は土石流多発地帯

南木曽地域は、古来から山津波や土石流による被害が多く、土砂はもとより、大きな石、木材の切り株時には根付きの木などを大量に含んでいるのが特徴です。この山津波や土石流を南木曽では、蛇抜けと呼んでいます。山の斜面を巨石がぶつかりあつて火花を散らしながら転がり落ちるのを、龍が山から抜け出てきたように見える「トシヨリ」から、地元の人々は蛇抜けと表現したのでしよう。山の斜面が間近に迫る地形と雨量の多い気候から、この地域は土石流多発地帯となっています。

伊勢小屋沢の蛇抜け

遺跡にも、縄文蛇抜けと呼ばれる土石流の跡が見られるように、南木曽地方は太古の昔から蛇抜けの常習地帯でした。明治以降、記録に残るだけでも、明治三七年の、吾妻村の大蛇抜けと昭和三年の、広瀬の山つな



昭和40年7月南木曽災害による惨状



伊勢小屋沢その後の45年

み昭和九年の読書村の集中豪雨などで、大きな被害に見舞われています。

なかでも、昭和二八年に発生した、伊勢小屋沢の蛇抜けは、橋梁、鉄橋、教員住宅を押し流すほどの大災害。避難途中の子ども二人と教員夫人の計三名の犠牲者を出すと、実に惨憺たるものでした。記録集「じゃぬけ伊勢小屋沢その後の45年」には、その惨状をこう語り伝えています。(抜粋)

被害の舞台となった西筑摩郡読書中学校は太古の昔、木曾川が形成した河成段丘のすぐ下にありました。この段丘の下はすぐ校舎となり、校舎の終わる所は木曾川の急流でした。この一〇m近い屏風立ちの段丘の上にはわずかの斜面があり、その奥は御岳に続く山々が連なり、深い密林地帯となっていました。木曾川に削られた深い谷底の猫の額の地を選んで校舎は建てられていたのです。

その沢が滝をなして段丘を下る所に、平屋の教員住宅が三戸、生い茂る木々に覆われて建っていました。昭和二八年、その年は七月に入ってから雨の日が続き、そして災害の日を迎えたのでした。三日続いた長雨は夜半から豪雨となり、夜が明けると、雨は太く白い束となつて飛び、木曾川は、赤褐色の泥水が渦巻き泡立ち、砕けた飛沫が空中に飛び散る中を、根こそぎされた一〇数mの太木が矢のように流れ下り、水底を転がり

昭和28年7月20日伊勢小屋沢の被害状況

	読書村	吾妻村
死 傷 者	死者3名、負傷5名	死者1名、負傷2名
全壊流出家屋	全壊1戸、流出5戸	全壊2戸、流出1棟
浸水家屋	73戸	13戸、工場浸水6
非住家被害	中学校の外、全壊2戸、浸水15戸	流出1棟、全壊2戸
耕地被害	田9町5反、畑12町歩	田畑の冠水8町歩、同土砂流入3町歩
土木被害	決壊流出等76か所	道路決壊・流出10か所、橋梁流出10か所、入ん堀決壊10か所
その他	荒廃林地144町歩	耕地流出埋没4町6反
被害総額	8,406万円	3,000万円

下る石音は、不気味な音をあたりに響かせていました。

そんな朝「トドトド」という地鳴りのような鈍い音かしたかと思うと、ぐらぐらと校舎が揺れ、校長住宅の屋根はそのままとしんと落ち込みました。

職員が飛び出した時には、木曾川右岸の段丘が溶けた塊となって吹き出し、この茶褐色の塊は、中から岩や石、木、泥水を空中に向かつてはじき出しながら、中学校目掛けて襲いかかってくるのでした。

「逃げる、サイレンを鳴らせ、逃げる」。それは校長が生徒に呼びかける声でもあり、自身に言い聞かせる声でもありました。緊急を告げるサイレンは全校に響き渡り、生徒が走る後を追いかぶさるように、巨大な塊のしかかってくる。

校庭を隔てたやや小高い所に、生徒はなんとか避難を終えました。生徒たちは、頭上に覆いかぶさってきた巨大な塊に追いかける不安で、歯がぐくぐくと鳴り、「お母さん」と母を呼ぶ声があちこちにあがっていました。

わずかに第一波は逃れたものの、眼前の段丘はすっかり膿みたたれ、今にもこの退避地へ崩れかかってくる勢いです。

最も安全と思われる木曾川対岸へ移動するにも、そこへの唯一の交通路である桃介橋の間は、山津波によって遮断されています。全くの孤立無縁、限らない恐怖に職員と生徒がさらされているのでした。

校長以下職員、そして生徒たちは、逃げ遅れた者の捜索救助を開始しました。木曾川の岸の木の枝にぶら下がっている少女、石と石の間に埋もれてしまった校長の奥さん、宿直室の泥の間に沈んでいた棚秋先生…。逃げ遅れた数人の生徒や関係者は、一として救出された。しかし、棚秋先生の奥さんの姿と校長先生の二人のお子さんの姿が見えません。

対岸では半鐘が鳴り、わが子の安否を気づかう親兄弟がぞくぞくとめかけています。「セイトゼンインブジ、セイトゼンインブジ」線

り返し手旗信号が送られ、手を取り合つて喜び親の姿がそこにありました。雨がやややみになり、山鳴りは間遠になっていました。この時、消防団によき、蛇抜け跡のおびたしい量の土砂と岩石、流木の上に木材を連ねる架橋工事が着々と進み、ついにそれは成功。再び橋を渡り、生徒は無事、親の胸へ飛び込んだのでした。

この間、一つの遺体が発見されました。榎秋先生の奥さんです。校長先生の二人のお子さんは、生徒・職員の名義の捜索にも関わらず、ついに発見されることはありませんでした。伊勢小屋沢蛇抜けの被災地は、中学校を中心とする文教地区でした。それだけに被災からの復興問題は、一地域の課題に留まらず、物理的にも精神的にも全村的な課題でした。物理的な復旧工事の推移はともかく、精神的な打撃からの復興に力を尽くしたのは他ならぬ被災者である教師でした。七年後、災害記念碑・追悼碑の発案・実行したのも先生方でした。

ちよつと読書
中学校教員住宅
があったと思われ
る位置に、蛇
抜けによつて押
し出された通称



悲しめる乙女の像

「平石」と呼ばれる大きな岩があります。この平石の上に、昭和三五年、伊勢小屋沢水害記念碑、悲しめる乙女の像、蛇抜けの碑が建立されました。

蛇抜けの原因と防災対策

蛇抜けの原因には、南木曽地方の自然環境が挙げられます。南木曽岳が町のほぼ中央に位置し、標高は一六七六m。地質は花崗岩であり、表土に近い部分は風化が進み、これにより生産された砂れき土によつて表面が覆われていて、斜面も急峻、山地崩壊の危険が高くなっています。この点が、木曽谷の北部地方や御岳山系の地質との相違点です。

雨量は本州中央高地気象区のうちでも最も多い地域であり、名古屋地方の1.6倍にあたります。南木曽岳と伊勢湾を結ぶ線にあまり高い山がないので、梅雨期や台風シーズンに伊勢湾方面からの北東へ進む湿った気団がこの山にぶつかり、大雨を降らせられます。また、地形的に雷雲が発生しやすい気象条件で、長雨の続いた後の雷雨は山津波の原因となっていました。昭和三年・一九年の、広瀬の山津波は雷雨により発生しています。

その一方、蛇抜けの原因として社会条件を挙げることもできます。本来森林は、水源を涵養する役割をもっています。こうした森林自体が持つところの防災治水機能は古くから経験的にもよく知られています。ところが、南木曽地方では、いったん蛇抜けが起きると、その発生源から下流にかけては様相が一変します。そしてその後、大雨が降る度に土砂や転石が流動、特に、沢筋の途中に大量の土石が堆積している場合、その下流地帯は、はなはだ危険な状態にあるといえます。山林の面積を伐採し、その後の跡地の処置が不備な場合も、社会条件による自然破壊といわざるをえません。特に、昭和三四年の伊勢湾台風の直撃は、自然林を著しく崩壊、しかもその後これらの風倒木処理と併せて実施された大面積皆伐成長量を遥か上回る伐採が傾向を助長することになりました。

学識者によれば崩壊因子として「林齢が最大で、次いで傾斜、林道が大きく、林相と地質も関係している」と指摘しています。表に示すように、人工林地域が自然地域の1.9倍

南木曽地方国有林調査地全域平均の崩壊因子順位

順位	崩壊因子	区分	崩壊率	÷	備考
1	林齢	幼齢林地域 社齢林地域	15.4 2.9	5.3	男埴沢・上山沢は資料欠 (幼齢林は20年まで)
2	傾斜	24°以上地域 24°以下地域	7.9 2.1	3.8	上山沢を欠く
3	林道	林道沿い地域 非林道地域	15.1 5.1	3.0	田立・床浪川地区のみ
4	林相	人工林地域 自然林地域	9.3 5.0	1.9	上山沢以外は伐採跡地を含まず
5	地質	粗粒花崗岩地域 中粒花崗岩地域	9.2 5.4	1.7	男埴沢・上山沢は資料欠 (花崗斑岩・石英斑岩を含む)



昭和40年戦沢の氾濫

の崩壊率という点も、注目すべき点です。

このような山地崩壊の因子分析をみただけでも、自然的条件はもとより、社会的条件もまた、南木曽地方の蛇抜けの発生原因と密接な関係があることが理解できます。記憶に新しいところでは、昭和四〇年・四一年の両年にわたって、木曽川左岸で蛇抜けが発生しています。その後、昭和四七年、五〇年の集中豪雨により多大な被害を受けています。建設省ではこれらの被害をかんがみ、昭和五三年度に、滑川・与川・伊奈川・蘭川の四支川を直轄砂防区域に編入しています。

南木曽の直轄砂防事業

《与川》

摺古木山付近を源流とする上山沢と南木曽岳を源とする下山沢の二溪流によつて高曽根山を周回し、与川渡で木曽川に合流する流路延長13.5km、流域面積47.2km²の河川です。与川では、下山沢第一砂防ダム、下山沢第二砂防ダム、宇礼沢第一ダム、上山沢第一砂防ダムが完成。現在、宇礼沢第二砂防ダムが施工中です。



下山沢第一砂防ダム(与川)

《蘭川》
南木曽岳周辺に源流をもつ、長者畑川、額付川及び男埴山を源流とする男埴川を合流して、南木曽町で木曽川に注ぐ流路延長17

km、流域面積72km²の河川です。このうち、男埴川は木曽水系のなかでも最も早く砂防事業が行なわれ、昭和五七年には当時の石積堰堤が発掘されました。これは、近代砂防の祖、ヨハネス・ドレイケが視察したという記録が残されており、その遺跡は現在、大崖砂防公園として保存されています。



額付床固(蘭川)

蘭川では、額付第一砂防ダム、額付床固工郡床固(四基)、木戸沢第一砂防ダム、長者畑第一砂防ダムが完成しています。その他の河川では、戦沢第一砂防ダムが完成。現在、梨子沢第一砂防ダム、神戸沢第一砂防ダムの工事を施工中です。《ハード・ソフトを合わせた対策》

上記のように、南木曽町には砂防事業が実施されていますがこれだけでは不十分です。こうしたハードの対策と同時に、災害が発生した時に臨機応変に対応できる警戒・避難体制も作り上げていかなければなりません。建設省では、平成一年、梨子沢、額付川に土石流監視施設(監視カメラ・ワイヤーセンサー・震動センサー)を設置。ハード・ソフト両面からの対策を行なっています。



大崖砂防公園

参考文献

- 『南木曽町誌』
- 上下巻一九八二年 南木曽町
- 『じゃぬけ 伊勢小屋沢その後の45年』
- 一九九九年 南木曽町
- 『木曽三川百年のあゆみ』
- 一九九五年 建設省

歴史ドラマが織りなす緑の山里

雲の切れ間から、光の矢束が放たれた。街道を行く旅人は、まぶしそつに、空を見上げる。額の汗をそつとふき取ってくれるのは、木立を渡る風。苔むした岩も川岸も木々さえも、歴史ドラマが織りなす緑の山里は、香り立つ季節を迎えているようだ。

さん用意して、早くおいでとはかりに旅人を待っていてくれるはずだ。

歴史の舞台となつた妻籠宿

南木曾の名を一躍有名にしたのは、中山道の宿場町「妻籠宿」です。ここは全国で初めて、古い町並みを保存した宿場町。軒先からは、緋の着物をきた町屋の娘がでてきそつな…。初夏のまぶしい陽ざしはそんな町並みを包みこみ、歴史楼のようにゆらゆら揺れています。妻籠宿で「レジャー」をかつててくれたのは、南木曾町博物館の名誉館長、遠山高志さん。オトクをうければ、水戸黄門様に変身してしまうような、笑顔の奥に自信をみながら、深さなのでしょうか。中山道をはなびり歩きながら、遠山さんの快活なおしゃべりの始まりは、ここから。

「ほら、一階に比べ、二階の窓の方が突き出ているでしょ。あれが出梁造りです。少しでも部屋を広くするために、一階をあおして出っばいさせたんですよ。一階が道にかがさるよつに突き出ているから、旅人は雨に濡れることがない。宿場の建物は軒を連ねていますからね」

なるほど、機能的でありながらこの建築美。その繊細な心使いは卯建の屋根にも表れています。

卯建とは、屋根の両端を一段高くした壁のこと。両端を高く上げ、火災のときの類焼を防

ぐよう工夫したもので、木造建築が密集する宿場では、大切な機能。こつとした智慧は暮らしの中から生まれた日本ならではの伝統なのでしょう。堂々とした体躯をみせる脇本陣奥谷で、遠山さんはこんな説明をしてくれました。

「この黒光りしている木目、美しいでしょ。これは、囲炉裏の煤をそつぎんで毎日磨きこんでいく間にこつたてきたんです。でも、ここから上を見て下さい。光ってないでしょ。昔の人は身長が低かったため、ここから上は手が届かなかつたんですね」

黒光りの板壁から伝わってくる人間模様、遠山さんの説明がなかつたらさつと見落としてしまつような生活の息吹が、彼の言葉の端々から、まるで絵巻物のように広がっていました。そしてお次は、妻籠宿本陣。木曾一宿のうち、唯一復元されている本陣です。その天井といた

ら、見上げれば首が痛くなるほどの高さ。遠山さんの弁によれば、国立大学の先生方が史料を研究の上、復元されたのですから、この程度の



妻籠宿本陣

高さはあたはずです。囲炉裏の煙がこもるのを防ぐためでしたが、冬の寒さはさぞさつかつたでしょうね」

たてようね」

そのお宿に休憩されたのが、幕末のトロン皇女和宮。皇女が鎮座しましたという、上段の間は思いの他狭く、これにもびっくり。このお部屋で和宮は、わが身を思い、涙をこぼされたのでしょうか？

日本とつづ国の命運を一身に担われた姫。この時代を遡ること二六〇年余り。天下分け目の関ヶ原をめざし、妻籠に逗留したのが後の二代将軍秀忠率いる軍勢。秀忠は妻籠城に一夜の宿を求めましたが、三万八千人にも及ぶ軍兵は、街道筋の野営したたか。兵糧持参とはいえず、きつと、宿場は蜂の巣をついたような騒ぎだつたでしょう。天下の一大事の舞台となつた妻籠宿。その最後の本陣当主が明治の文豪島崎藤村の実兄島崎広助で、南木曾の夜明けのために、生涯を賭したというのも、ドラマチックな妻籠ならではのこつでしょう。

妻籠宿をそぞろ歩いたら、お腹の虫も大騒ぎ。遠山さんオススメのお蕎麦屋さんが絶品だつたことはいつまでもありません。

幻の名瀑を町の財産に

妻籠宿が東西を結ぶ街道のドラマなら、田立の滝は、地元のトロロが生み出した「ミネ」です。大滝川の峡谷にかかる無数の瀑布の総称が田立の滝。ほとぼる飛沫は岩肌を彫り続け、その彫刻は無数の水が生み出した偉大な芸術です。今でこそ、額に汗にじませて登りつめ、天下の名瀑やキャンプを楽しむアウ



アウトキャンプ場



妻籠宿

緑が薫る南木曾町へ

車窓から流れ込む空気が、緑の風が変わつた。フロントガラスの向こうには、初夏の太陽をたぐり浴びた山々が、天にまで届けとわんぱかりに、美しい姿を浮かべています。東名高速道路名古屋ICから中央自動車道へ。山の連なりに合わせてよつな緩やかなカーブは、都会の「マシユ」とはまるで違つ、快適なドライブレディ。こんな時は、お気に入りのBGMが一番です。木曾谷へ。そんな旅気分をいそつ盛りあげてくれることでしょう。

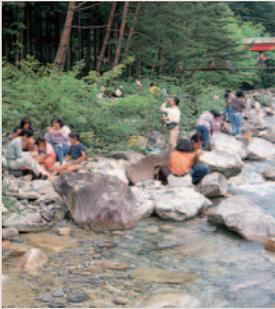
中央自動車道・中津川ICからは国道一九号へ。沿線の蕎麦屋の看板が、お腹の虫を刺激しますが、ここは町の一字。木曾谷南部の玄関口、南木曾町は、きつと歴史もフルメタもた

和智野神社祭礼 - 妻籠7月23・24日 -



妻籠宿鎮守さまの祭り。大神輿が宿場町を練り歩きます。

柿其溪谷祭 - 柿其溪谷8月第1日曜日 -



涼しい柿其溪谷の河原で、夏の1日がたっぷり楽しめます。ますのつかみどり大会、流しそうめん、なげ餅、お酒飲み放題など子どもからお年寄りまで参加できるイベントがてんこもり。

南木曾町 EVENT INFORMATION

白山神社祭礼(与川)5月5日・10月18日
妻籠健康マラソン5月第3日曜日
和智野神社祭礼(妻籠)7月23日・24日
柿其溪谷祭8月第1日曜日
たいまつ祭(妻籠)8月第4土曜日
与川の秋月観月会例年仲秋の日
花馬祭(田立)10月3日
ろくろ祭(広瀬)・拾笠祭(蘭)11月3日
文化文政風俗絵巻之行列11月23日



交通のご案内

名古屋方面からお車をご利用の方



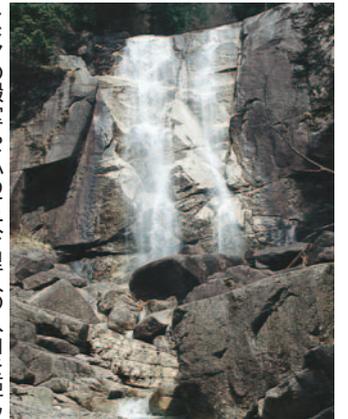
名古屋方面から公共交通機関をご利用の方



お問い合わせ

南木曾町観光協会・南木曾町商工観光課
〒399-5301 長野県木曾郡南木曾町 南木曾町役場内
TEL.0264-57-2001

気ままにJOURNEY



田立の滝(天河滝)

トドアの殿堂も、かつては里人の入山を拒んだ神聖な山。急峻な斜面も、自然が人々を拒んだ理由なのでしょう。

その聖なる山の偉大な自然美に着目し、観光資源として開発しようとしたのが、幕末生まれの宮川勝次郎でした。

明治に入り、単独で滝見物にでかけた彼は、素晴らしい滝に魅せられとりに。滝を天下に知らしめようと登山道を開くことを思い立ちました。

もともと数学と測量術を学んでいた勝次郎には、技術的な心配はありませんでしたが、びっくり仰天したのは親族はもちろん里人たちでした。山霊の崇りを信ずる里人たちの反対

は熾烈なもので、計画は幾度も頓挫しかかりました。そんな彼を唯一支援したのが愛娘、測量に出る勝次郎におにぎりをもたせるなど、物心両面の支援でした。

この逆境を好転させたのは、中央線三留野駅の開通でした。三留野駅開通に際し訪れた美濃地方の人々は、このほか幻の滝に興味を寄せ、勝次郎が開いた直登りと梯子連続の道を登りつめ、名瀑を目の当たりにした時の感動は、言葉で忘れるほどのものでした。こうした賛同者が集つようになり、明治末期にはなんとか道らしい道を開くことができました。

ちなみに、山霊の崇りを一蹴した勝次郎も、文明の崇りには恐れをなしていたようで、寿命が縮むという生涯写真を撮らなかつたため、遺影は残っていません。

山里に咲いたロマンス

文明の功罪をこの地にもたらしたのは、福沢桃介です。

桃介は明治元年埼玉県に生まれ、福沢諭吉の娘婿になりました。名古屋電燈への投資をきっかけに電力事業に手を染めた桃介は、一河川一会社主義の下、次々と水力発電所を築き



桃介記念館

電力王と呼ばれるようになってきました。なかでも、大正一二年一二月に完成した南木曾町の読書発電所は、戦前の木曾郡内では最大のものに。その前年、建設資材の運搬路として桃介橋を架橋しています。



川上貞奴

福沢桃介

この桃介橋は木製の吊り橋としては日本有数の長大橋。広大な木曾川に美しい姿をみせています。

その桃介を助け、よきパートナーであったのが、わが国女優第一号といわれる川上貞奴でした。風光明媚な南木曾町は、二人が過ごす濃密な時間をいそう盛りあげたことでしょう。この地に別荘を求めた



桃介橋渡初敷(中央の左福沢桃介、その右川上貞奴)

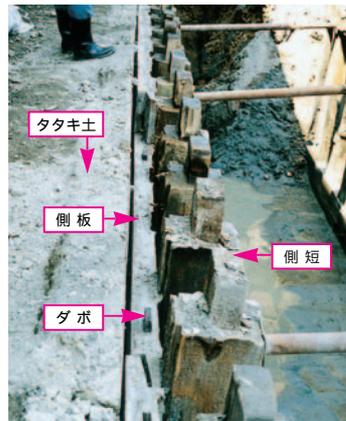
桃介は、夜毎、政財界の実力者や外国人技師などを招いて、華やかな宴を催しました。きらびやかな夜会服に身を包み、ワルツを踊る桃介と貞奴。その美しさに村人は、息を飲んだことでしょう。

近代化に励むこの時代、その利便性を一方で享受しながらも、木曾は電力開発と引き替えに、木曾川の水利権を失ってしまうことになりました。

南木曾町に残した桃介の足跡は、読書発電所と桃介橋、そして別荘。このうち、桃介橋は近代化遺産として平成五年に復元。一部火災に遭った別荘も復元され、桃介記念館として一般公開されています。

歴史ドキュメント

流水に直角方向で張られ、両端の継ぎ手部及び格子上には、和釘で止められています。中短は、敷板の上に置かれた地覆木に厚を差して建て込まれているのに対し、側短には地覆木がなく直接敷板に厚を差して建てられています。(図4)



側短と側板の継手。側板の左側はタタキ土

側短には厚さ二〇cmの側板が取り付けられ、側板の最上部は、敷板に穿った幅四cmの溝に差込み、六枚の側板を順次九〇cm間隔に「雁いめち」(雁いぼ)を差込みながら積み上げていきます。また、側板と側短の継ぎ手は、蟻継ぎで継ぎ手口の幅が上部一七cm、下部一四cmと下部にいく程、幅が狭くなっています。このことから、側短の施工は、先ず側板を積み上げて固定し、側短を上部から蟻仕口に入れて込んで施工したものであると考えられます。

甲蓋板は厚さ一五cm、幅一九〜三二cmの桧板で、行板の上は和釘で止められています。甲蓋板は門樋の中央で相欠けで継がれていますが、これは六〜八枚毎に門樋全幅の横方向の変形に対する補強をしたものだと考えられます。

地覆木及び行桁の継ぎ手は、台持ち継ぎで中にダボが打ち込まれ、さらにカスガイ一枚で補強

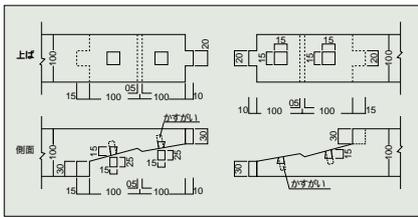


図6 地覆木・行桁の継手(台持ち継ぎ)

するといつ入念な工法が採用されています。このような地杭、格子土台、側板、地覆木と行桁、敷板と甲蓋板の施工や継ぎ手などの木組みは、寺社建築同様、入念で強固な構造になっています。(図6)

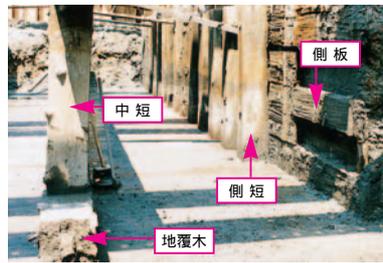
これから判断すると、門樋全体を一本の柱となるように、板の組合せや継ぎ手を強固なものにしています。また、門樋本体前後の格子土台の間隔が狭くなっていること、枕土台や格子の下に打ち込まれている地杭などの構造は、門樋をより強固なものに、門樋全体で堤防の土圧や圧密沈下に対し、より一層の強化を図ったものと考えられます。さらに、門樋全体は厚さ二〇cmのタタキ土で被覆されています。

二、タタキ土
扉板部をはじめ、門樋全体の格子土台の中詰め、門樋の側板や甲蓋板上部いわゆる門樋本体部全体、並びに枕土台の下部、樋上土抱板の背後などが厚さ二〇cmのタタキ土で被覆されています。タタキ土の採用は、水漏れを防止して堤体の弱体化を防ぎ、又門樋の保護のためと思われる。

タタキ土の成分は、X線回析分析の結果、カリ長石、方解石が主要鉱物として検出され、特に石英の存在量が著しく多いのが特徴です。また、この他、粘土鉱物であるカオリン鉱物もわずかに



地杭、土金板とタタキ土の施工状況



中短及び側短と側板の状況、背後の土砂はタタキ土

検出されまし。このタタキ土に使用した石灰の産地は、先に建造された福東四間門樋の資料から、揖斐郡大野町更地、また、マサ土は三重郡朝日町小向から購入したと思われる。



金廻門樋に使われていた金物

三、金属材料
が使われている。
クギ、甲蓋板と桁木の打ちつけ。
カスガイ、桁の連続。
ボルト、ナット、座
金鴨木の連続。
薄板、樋上土抱板背後に貼付。
真ちゅうキャップ、観音扉の軸と軸受け。

金属材料	成分	生産地
カスガイ	鋼鉄	英国からの素材を輸入し、日本で加工と推定。
ボルト	鋼鉄	ネジ加工した製品を英国から輸入と推定。
ナット	極低炭素鋼	ネジ加工した製品を英国から輸入と推定。
薄板	中・高炭素鋼	英国から輸入と推定。
真鍮キャップ	鉛添加黄銅	国内の種々の製品を調査して製造した可能性が高い。

表-1 金属材料の生産地

四、観音扉が使用されている。
観音扉は堤防内外の水位差によって自動的に開閉する合理的機能を有しています。戸板は数枚の厚板を榎木でつなぎ、一枚の板としたもので、端の厚板に軸を作り出し、隣の板とボルトで緊結補強しています。軸及び軸受けには真ちゅうのキャップが使われています。戸板枕土台を下の軸受けとし、上の軸受けは戸前男柱をはさんでボルト締めした二本の長い材木、鴨居木に取付けています。これは、戸板の開閉を容易にするための遊びをとること四枚の戸板の水中での浮上に対する工夫です。

金廻四間門樋の評価

一、技術史上の価値
近世の伝統技術を示した土木工芸録の内容を裏証するもので、桧の使用や観音扉・タタキ土の使用など、西濃輪中地帯の地域性を反映しています。

江戸時代の水防組織である輪中を統合する水利土功会の結成に従い、その結果、幅四間の巨大な門樋が、明治初期に建造されたことと推定されます。

二、文化財としての意義
重要文化財としての五項目の指定基準
イ、意匠。
ロ、技術。

八、歴史的価値
二、学術的価値
ホ、流派的、地方的特色。
これらのいずれも満たしていると考えられます。

門樋は輪中の排水、取水と逆水留に使われる基幹施設です。この金廻四間門樋も同様に、明治時代から昭和初期までの高須輪中の生活を支えてきたでしょう。金廻四間門樋内部の桁や短柱の上下部や甲蓋板は、一〜三cm、変則的に摩耗しており、門樋内部の複雑な水の流れを知ることが出来ます。この摩耗の度合いからも当時の役割の大きさを知ることが出来ます。



平成12年3月に復元完成した金廻四間門樋

参考文献

- 『平成八年度産業遺産調査報告書』建設省木曾川下流工事事務所
- 『金廻四間門樋について』土木史研究第20号平成二二年五月発行

たたき土について

「たたき」って何だろう?

わが国の伝統的木造建築に土壁塗りがある。土壁塗りは左官の技法の一つであり、土に水を加えて練ったものを「こて」で塗るものである。これとは少し異なる左官技術として、家屋の土間やかまどなどの構造物を造るときに、土に石灰と少量の水を加え混ぜ合わせたものをトントンたたいて突き固める工法がある。これも江戸時代から伝わるわが国の左官技術の一つである。

「たたき」とはこの土をたたきしめる技法のことをいう。写真1は、たたき工法で仕上げた土間とかまどの一例である。



写真1) たたきによる土間とかまど

たたきの歴史

たたき土は、すでに紀元前二五〇〇年ごろ古代エジプトのピラミッド建設の際に使われたといわれる。しかしこの場合は、たたき土をたたきしめたのではなく、たたき土をつなぎの目的で石と石との間に詰めるだけであった。紀元前二〇〇年ごろ古代ローマの城壁・神

殿などの建設では、石と石との間にたたき土を入れて、たたいて突き固める工法になった。たたきしめる技法で造られたわが国における最初の構造物は、七〜八世紀ごろの佐賀県三養基郡上峰町の、埴土墨跡ではないかといわれている。たたき構造物は、その後幕末から明治時代にかけて全国的に広まり普及していった。

大正時代のセメントが安く入手でき、構造物がコンクリート工法に代わっていく過程で、たたき工法は途絶えていった。しかし、たたき工法は強くて長年耐える技法であることから見直されつつある。

たたき土の成分

たたき土は、土に石灰を加えたものである。土は田畑にある土とは異なり、種土・タネツチ(又はマサ(真砂))ともいわれる土で、花崗岩が風化した土のことである。中部



写真2) 金廻四間門樋たたき施行(たたきの復元施行)

地方以西に多く存在する。石灰とは、消石灰(Ca(OH)₂)のことで、石灰石・炭酸カルシウム(CaCO₃)から造られる白い粉末である。その製法は、石灰石(CaCO₃)を約900℃で焼いて生石灰(CaO)とし、さらに水(H₂O)を加えて出来る。

建設当初の金廻四間門樋に使用されたたたき土もX線解析の結果、石英、カリ長石、方解石が多く含まれていることから、マサと消石灰とを混ぜ合わせたものであることは間違いないが、マサと消石灰の混合割合は不明である。金廻四間門樋に使用された消石灰は、大垣市赤坂町の金生山あるいは大野郡大野町更地で産出したものであると推定されている。

今回復元された金廻四間門樋のたたき土は、マサ土と消石灰の混合割合を三対一とし、愛知県海部郡の岡田建上によつて二〇〇〇年一月二十九日に施工された写真2。

たたき土の硬化原理

マサに消石灰を混ぜたたたき土が、たたきしめたあとと数日経過するとどつとして石やコン



プロフィール: 高橋 伊佐夫 氏

1937年生れ。
工業技術院名古屋工業技術試験所から岐阜県の工業高校教員・機械を経て、現在岐阜大学非常勤講師・産業考古学として勤務。
産業考古学会・中部産業遺産研究会・岐阜産業遺産調査研究会・技術史教育学会に所属。岐阜の技術史探訪・岐阜の水力発電史・岐阜の治水史などを遺構・遺物に基づき調査研究し学会などの各会誌・会報に報告。1999年4月に岐阜の産業遺産デジタルガイドブックを作成。ホームページのアドレスは <http://www.a-works.co.jp/users/ih> である。



写真3) 近六開門 明治40年5月、たたき工法で築造した逆水留樋門下流側 1988年11月撮影

TOPICS

デレケゆかりの品々が木曾川文庫に！

ミレニアムの今年、日蘭交流四百年にあたる記念すべき年、日本の治水と砂防の基礎を築き、木曾三川分流工事を指揮したオランダ人技師ヨハネス・デレケが使用していた眼鏡が木曾川文庫に寄贈されました。寄贈したのはデレケの孫、マリア・G・デ・グラフさん。革のケースに入れられた眼鏡は左眼用のレンズがなくなっているものの、保存状態は良好です。

また、さる五月一三日には、岐阜県海津町で、日蘭交流四百周年記フォーラムが開催されました。フォーラムに先立ち、オランダ大使館科学技術アタッシユ(代表)のアリエン・ヴァン・ブロックラ

ンドさんより、ヨハネス・デレケとその娘のストフェリーナさんの写真が木曾川下流事務所長に手渡されました。この写真を寄贈したのは、デレケの孫のソナ・ヴァン・デルベルトさん。一九世紀末に、東京の写真家により撮影されたものです。この貴重な写真と眼鏡は木曾川文庫で保存し、展示する予定です。



中部地域の主なたき構造物

たき構造物はまだ全国各地にかなり残されているが、中部地域における主なたき構造物には、明治一七年築造の旧四日市港潮吹防波堤(国の重要文化財)、三重県四日市市



写真4) 庄内用水元枳樋(明治43年たき工法で築造)1991年3月撮影

稲葉地町)・明治三四年築造の旧明治用水頭首(大愛知県豊田市水源町)・明治四〇年築造の五六閘門(岐阜県本巣郡穂積町)・明治四三年築造の庄内用水元枳樋(愛知県名古屋守山区)などがある。

写真3は、明治四〇年五月改築の五六閘門である。マサに35%の消石灰を混合したたき土でたきしめ、自然石を浮き石積みした構造物である。通常水は五六川から長良川に排水されるが、大雨のときは長良川の方が水位が高くなり、逆に五六川へ水が流入してくる。これを防ぐために築造された「連アーチの逆水留樋門」である。

写真4は、明治四三年六月改築の庄内用水元枳樋である。五六閘門と同様たき土でたきしめ、自然石を浮き石積みした構造物である。庄内川から農業用水を取り入れるために築造された「連アーチの樋門」である。

金廻四閘門樋のたき

金廻四閘門樋の施工年代は一八八四(明治一七年)頃の建造と推定される。木造ヒノキ・ケヤキ・マツ)を紀州流社寺建築方式で組

み立て造ったものである。この構造物にはたき工法が使われていた。使用されたたき土はマサに消石灰を混ぜたものである。使用箇所は、土台の空隙部・側壁の背後、甲蓋板の上部であり、何れも約20cmの厚さであった。戸前柱つしるの土枳板の背後にも使用された。(写真5)



写真5) 金廻門樋発掘時たき 1996年4月撮影

参考文献

- 一) 飯塚一雄 「人造石(たき)工法による明治期土木構造物」『日本の産業遺産』
- 二) 玉川大学出版部1986.3.15 pp.130-155
- 三) 愛知の産業遺産・遺物調査保存研究会 『いま「たき」を考える』
- 四) シンポジウム講演報告資料集1991.3.9
- 五) 大橋公雄 「人造石(たき)工法とその遺構」『産業遺産研究』第5号 中部産業遺産研究会 1998.5 pp.47-62
- 六) 建設省木曾川下流工事事務所 『産業遺産調査報告書』1997.3

募集して います！

野鳥のボランティア調査員

建設省では、河川に係わる自然環境の基礎調査として、河川水辺の国勢調査を実施しています。木曾川下流工事事務所では、今年度の調査の一環として木曾三川の下流部で鳥類調査をおこないます。地域の皆さんにも河川環境を知って頂くために、調査員を募集します。ご協力をお願いします。

調査地点
長良川左岸側の長良川大橋から下流へ約3km、東海大橋から長良川大橋の間、約3kmのどちらか、一区間の往復

募集要項
平成二二年九月下旬の一日
平日早朝より参加可能な方、一〇名程度を募集。双眼鏡などの観察機材は各自でご用意ください。交通費・食事は各自で負担となります。

応募方法
平成二二年八月三日(木)必着
八ガキに住所、氏名、電話番号、年齢、職業、鳥の観察経験を記入し、下記まで送付ください。

応募宛先 / 問合せ先

〒511-0862 桑名市大字播磨字沢南81
建設省 木曾川下流工事事務所 調査課
水谷 / 堀 TEL0594 - 24 - 5715

民話の小箱

白蛇のお告げ

むかし、むかしのお話です。

与川をさかのぼった山では、貴族の家をたてるために、

大勢の木こりが集められ、

役人のもとでたくさんの木が切られていました。

その木こりのなかに、正直者の与平という男がいました。

ある雨の激しい夜のこと。

与平はトントンと小屋を叩く音に目を覚ましました。

おそるおそる戸を開けると、

白い着物をきた美しい女の人が悲しげに立っているではありませんか。

そして女の人は

「これ以上木を切り倒すと、必ず悪いことが起こるでしょう」と言い残して、雨のなかにスーッと消えてしまいました。

あくる日、与平はこのことを仲間話しました。

木こりたちはこの言葉を恐れて、

仕事を続けることを拒みましたが、

役人は聞き入れてくれません。

とつとつ与平は、

「腹が痛い」と嘘をついて仕事を休んでしまいました。

その夜、いつかの女の人が現れて、

「明日、雨が降り始めたら、山の頂へ必ず逃げてください」といって、夕闇のなかに消えていきました。

翌日、女の人がいった通り大雨が降り始めたかと思う間もなく、

土石流は牙をむいて村に襲いかかり、

里の家々は跡かたもなくつぶされ、

中山道もくずれさってしまいました。

この時、与平は土砂に流されていく白蛇を見ました。

実は、あの女の人は、白蛇の仮の姿だったのです。

このことが起きてから、

与平は木こりをやめて馬方になり、

尾張の国から食物を運んだといつことごとです。

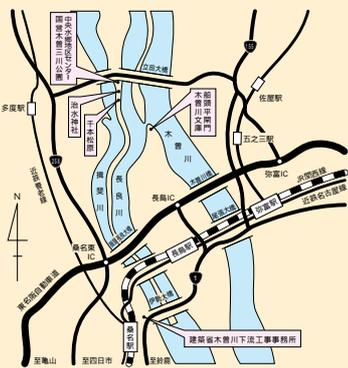
木曾谷一帯を襲う恐ろしい蛇抜け、

この災害を少しでも静めるために、

南木曾町には、石碑や地蔵様が多く建てられています。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・
木曾川文庫
〒496-0947 愛知県
海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近で起こった出来事、地域の情報などをお知らせください。

5月25日の文部省告示で船頭平閘門が重要文化財に指定されました。河川構造物としては、他に茨城県の横利根閘門が重文指定されています。

宛先 「KISSO」編集 FAX(052)671-8627

今号の編集にあたって、南木曾町のみなさん、建設省多治見工事事務所長瀬監督官並びに高橋伊佐夫氏に大変お世話になりました。お礼申し上げます。

次回は、岐阜県春日村を特集します。

木曾川文庫ホームページ

<http://www.kisogawa-bunko.cb.moc.go.jp>

表紙写真

左上:蘭川木戸沢第一砂防ダム 右上:読書発電所

下:桃介橋

『KISSO』Vol.35 平成12年7月発行

発行:建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所 〒511-0862三重県桑名市播磨81 TEL(0594)24-5715

木曾川下流工事事務所ホームページ URL <http://www.cb.moc.go.jp/kisokaryu>

制作:財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル) TEL(052)565-1976